

長砂谷1号墳
長砂谷製鉄関連遺跡

1988年12月

総社市教育委員会

序

「古代と21世紀をむすぶ風格ある文化創造都市」をめざす本市には、古代吉備の中核地として数多くの文化財が残されています。とりわけ埋蔵文化財は、質量共にすぐれたものが多く、それらを保護保存し、後世に伝えていくことは、私たちに課された大きな責務と考えられます。

しかし近年は市内でも大規模な開発事業が多く、文化財の保護と開発の調和は大きな問題となっています。

ここに報告する長砂谷1号墳、長砂谷製鉄関連遺跡は、個人の小規模な土取りに起因するものです。発見後直ちに連絡していただき、またその後種々の御協力いただいた地権者の森川勇氏には感謝の意を表します。この発掘調査において、製炭窯とされる窯状遺構の廃棄後、古墳が築造されたという事実関係の解明は、これまで不分明であった両者の関係を考察するうえで、きわめて貴重な事例といえます。こうした意味で、この小報が今後の保護保存に活用され、また考古学の研究資料として役立てば幸いります。

昭和63年12月

総社市教育委員会
教育長 浅沼 力

例　　言

1. この報告書は、総社市新本5793 森川勇氏宅裏山の土取りに伴い発見され、総社市教育委員会が実施した「長砂谷1号墳・長砂谷製鉄関連遺跡」の緊急発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は村上幸雄が担当し、文化係職員谷山雅彦、高田明人の助力を得て、昭和62年1月15日から1月30日まで実施した。なお調査期間中に和泉弘幸、石田善人両氏の援助を受けた。
3. 出土遺物の整理は、西平登代子の協力を得て社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 報告書の執筆、編集は村上幸雄が行った。
5. この報告書の高度値は任意高であり、方位は磁北である。
6. 第2図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図 高梁・玉島・岡山北部・岡山南部を合成し、その他の地形図は総社市発行のものを複製したものである。
7. この報告書に関する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

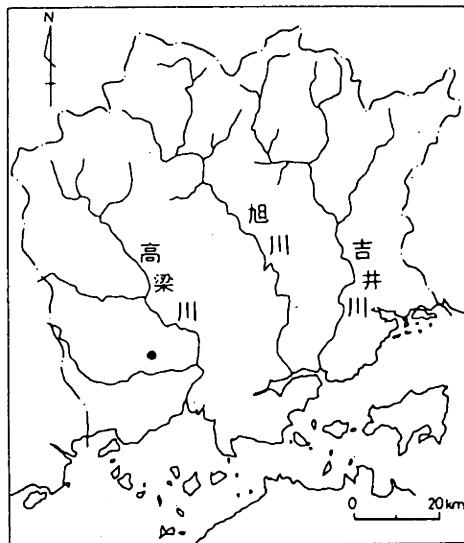
第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 地理的歴史的環境	1
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 長砂谷1号墳	5
第2節 長砂谷製鉄関連遺跡	9
付載1 岡山厚生年金休暇センター改修に伴う 金子古墳群の整備について	13
付載2 地中レーダー探査による 備中国分寺塔跡の確認調査	18
付載3 鬼ノ城 第II群礎石建物群表採の平瓦について	22

図 目 次

第1図 遺跡の位置	
第2図 新本川流域の主要遺跡	2
第3図 遺跡周辺地形図 (S = 1/8,000)	4
第4図 遺構配置図 (S = 1/80)	6
第5図 石室平・断面図 (S = 1/40)	7
第6図 出土遺物	8
第7図 1・2号窯状遺構土層図 (S = 1/80)	9
第8図 2号窯状遺構 (S = 1/80)	10
第9図 出土遺物	11
第10図 金子古墳群位置図 (S = 1/5,000)	12
第11図 7号墳出土遺物	15
第12図 7号墳出土遺物	16
第13図 備中国分僧寺跡平面図	18
第14図 地中レーダー探査位置図	21
第15図 鬼ノ城平面図 (S = 1/5,000)	23

図版目次

図版1	1. 遺跡遠景 2. 遺跡近景	25
図版2	1. 古墳周辺の掘削状況 2. 調査前の古墳	26
図版3	1. 開口した状態の横穴式石室 2. 墳丘土層断面	27
図版4	1. 調査後の古墳全景 2. 石室内の状況	28
図版5	1. 閉塞部と床面 2. 奥壁	29
図版6	1. 古墳と窯状遺構 2. 出土遺物	30
図版7	窯状遺構の検出と掘り上がり状況	31
図版8	1. 窯状遺構の横口部 2. 窯状遺構の床面	32
図版9	1. 土師器甕出土状態 2. 1号窯状遺構土層断面	33
図版10	1. 金子2・6~9号墳遠景 2. 金子1号墳整備状況(手前は4号墳)	34
図版11	1. 金子1号墳箱式石棺整備状況 2. 金子2号墳整備状況	35
図版12	1. 金子2号墳(南東から) 2. 金子6号墳	36
図版13	金子7号墳出土遺物	37
図版14	備中国分寺塔跡探査写真	38
図版15	備中国分寺塔跡探査写真	39
図版16	備中国分寺塔跡探査写真	40



第1図 遺跡の位置

第1章 調査にいたる経緯

正月気分も漸くうすらいだ昭和62年1月8日、市内新本の森川勇氏から宅地裏の畠を土取りのためパワーシャベルで掘り下げていたところ、古墳と思われる石積みを発見したとの電話連絡を受けた。早速現地に赴き調査したところ、尾根先端部の畠地のうち西側の $\frac{1}{3}$ ほどが深さ1mほど削られており、小形の横穴式石室と製鉄用の炭窯とされる遺構（以下、窯状遺構とよぶ）が確認された。注目されるのは、窯状遺構を切って古墳が築造されていたことである。

この小規模な土取り工事が必要となったのは、同氏宅が裏山の畠地の法面に接して建てられていたり、昭和61年6月の豪雨時に法面が数mにわたり崩落し、住宅の一部を破壊したため、畠地部分を削平しようとしたものである。現地の状況を見るかぎり、土取りはやむをえざるものがあり、また採土のための機械、車輛も借用していたため、早急に土取りを終らせたいという事情も判明した。

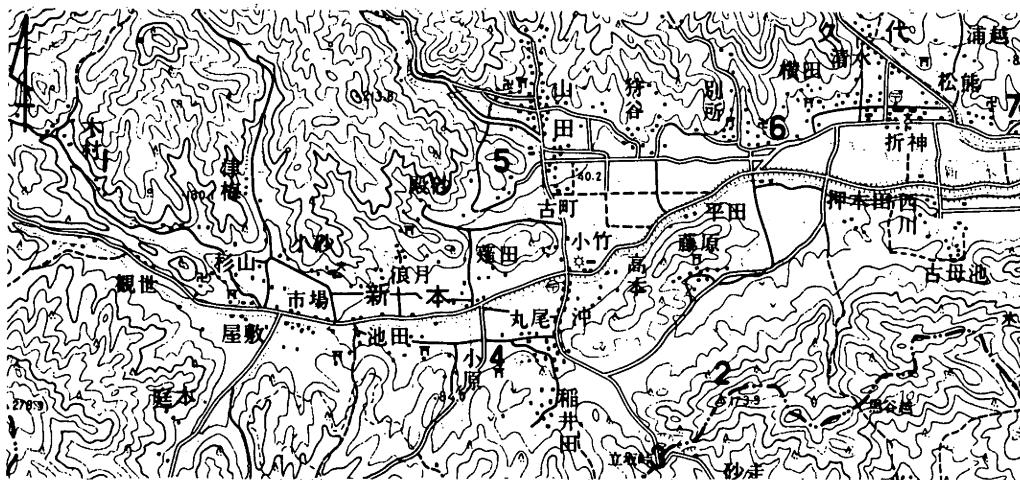
ともあれ、現地を現状のまま保つよう同氏に要請して帰庁し、直ちに県教育委員会文化課に連絡して指示を仰いだのち、諸手続を行って、緊急に発掘調査を実施することになった。

しかし、事態が緊急であったため、調査経費が計上できず、地権者森川氏の奉仕的作業と職員1名の労力をもって行うしかなく、このため最小限度の調査にとどめざるを得なかった。

第2章 地理的歴史的環境

岡山県には、東から吉井川、旭川、高梁川の三大河川が存する。いずれも中国山地に発し、吉備高原を縫って南流し瀬戸内にそぞぐ全長110～150kmの河川である。この三大河川とその支流及びその間に存する砂川、笹ヶ瀬川、足守川などの中小河川によって造出された広大で肥沃な平地が県南部一帯に拡がる。この地こそ、のちに古代吉備の中枢地として歴史の主舞台に登場する地域である。

さて三大河川のうち西に位置する高梁川は、県北西部の中国山地に発し、備中川、成羽川などを合しながら、標高400～500mの吉備高原を縫いつつ流域に小平地を生み、やがて吉備高原の南縁にいたり、ここに広大な総社平野を生みだし、さらに西から東流する小田川を合して瀬戸の内海に注ぐ。その流域は、律令制下の備中国の殆んどを包括する。総社市域についてみると、ほど中央部をこの高梁川が貫流する。左岸域には高梁川とその分流が造り出した肥沃で



1. 長砂谷1号墳 2. 第2団地内遺跡群 3. 立坂墳丘墓 4. 一倉遺跡 5. 砂子山古墳群
6. 横田才の鼻古墳 7. 長砂2号墳

第2図 新本川流域の主要遺跡

広大な総社平野が広がるが、右岸域はやゝ様相を異にしている。

この地域では、海拔120m余の山あいに発した新本川は、東流して中、下流域に小平地を生みだしがて高梁川に合流する。左岸域には標高300m弱の山並みが連なり、麓下には数多くの埋積谷を形成している。

さて、この高梁川右岸の新本川流域に我々の祖先が足跡をしたのはいつ頃であろうか。これまでのところ、旧石器時代に属する遺構、遺物はしられていない。圃場整備事業に伴って発掘調査された新本長瀬遺跡では、縄文時代早期と考えられる土器片が出土している。また水島機械金属工業協同組合第2団地（以下、第2団地と略称）造成に伴う発掘調査で、久代板井砂の小尾根の東斜面裾で後期の磨消縄文数片が出土した。この他には、縄文時代の遺物については確認されていない。なお遺構については未確認であり、縄文期の様相についてはいまだ不明である。

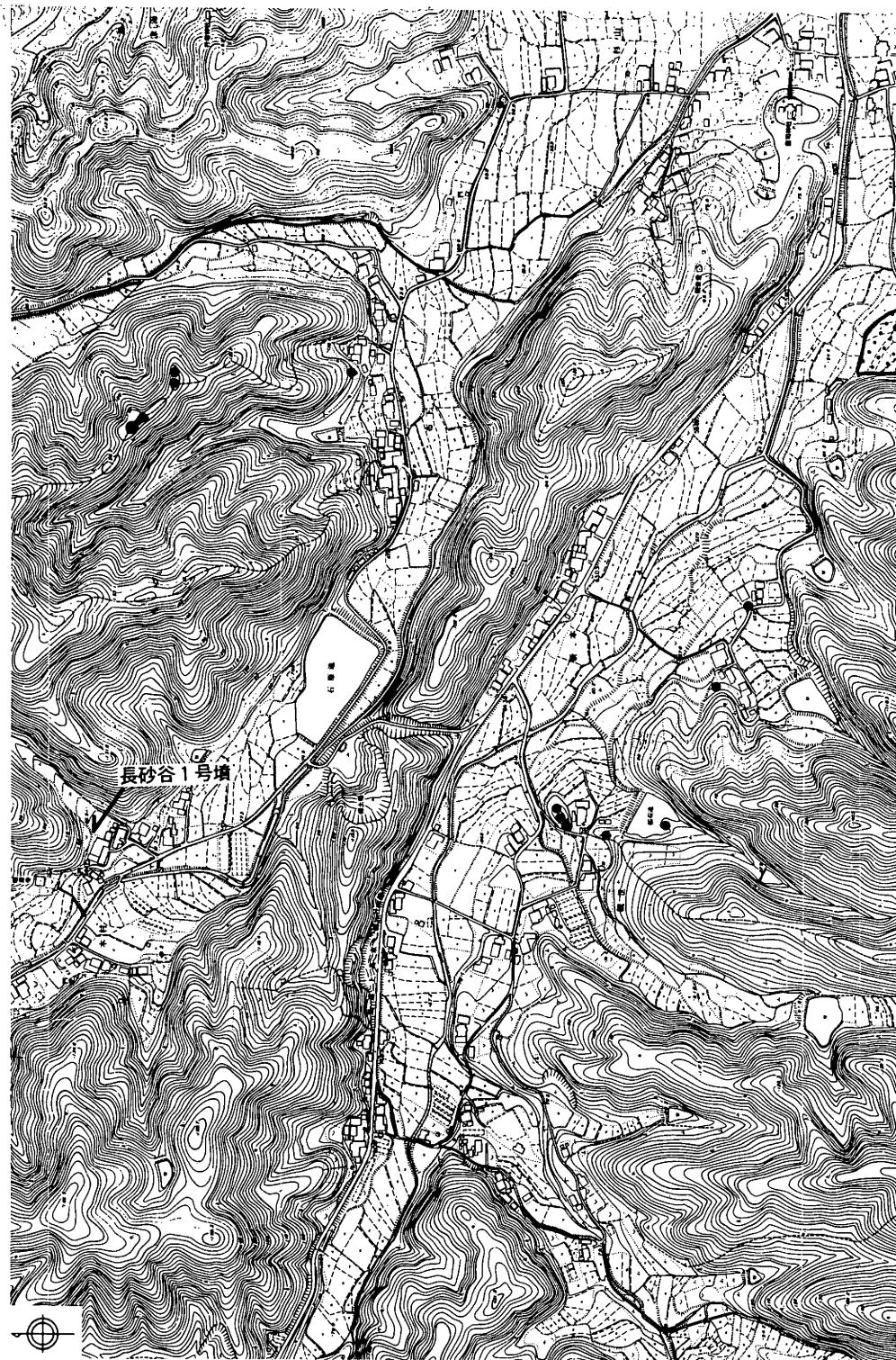
この地が祖先たちの本格的な活動の場となったのは、これまでの調査によると弥生時代中期以降である。久代の板井砂奥・大ノ奥・新本の一倉・長瀬・高本・田畠・稻荷遺跡などが代表例である。いずれも低い舌状の尾根上や裾部、あるいは埋積谷に形成された小集落跡である。分村という形態でのこの地への進出であろうが、拠点集落となる可能性のある遺跡はこれまで知られていない。しかし後期の後葉以降には、それらの集落の中にも墳丘墓を生みだす階層の誕生をみた。立坂弥生墳丘墓、伊与部山墳丘墓などにその状況をみることができる。またこの地では、古墳の築造も比較的早い時期に始まったようである。

三角縁神獣鏡を出土した秦の上沼古墳、全長56mの前方後円墳の秦大塙古墳、同じく38mの茶臼山古墳などの存在は、4世紀から5世紀の前半にかけては新本川の下流域に優勢な勢力の

存在をうかがわせる。しかし後半になると系列的な首長墳と考えられる全長32～52mの三基の前方後円墳で構成される、砂子山古墳群の存在にみると、中流域にその勢威をみる。これらはいずれも新本川左岸域の尾根上に立地しており、右岸域には前方後円墳の存在はこれまでのところ確認されていない。またこうした首長層を支える群集小墳も多く築造された。長砂古墳群などの少例を除き未調査墳が多いが、いずれも径10m前後の低小な墳丘をもち、箱式石棺や木棺直葬を内部主体とする。久代字藤原の集落背後の尾根上や久代字砂古地区には20～30基が群集している。後期古墳の大きな特徴である横穴式石室の採用も比較的早い時期に行なわれたようである。第2団地内の板井砂奥7号墳は6世紀前半の築造であり、時期の明確なものとしては高梁川以西の市内域では最も古いものである。また中葉以降、とくに後半期になるとその盛期を迎える、各地に群集墳が築造されているが、高梁川以東の市内域に比べると劣性は否めない。こうした中にあって久代大塚古墳は、径25mの円墳で、2.25mの石室幅をもつ新本川流域最大の横穴式石室墳である。対岸の金子石塔塚古墳は浪形石製の家形石棺を内蔵し、横田才の鼻古墳^③からは頭椎大刀が出土している。これらは新本川流域の有力墳である。終末期には、県内唯一の横口式石棺をもつ長砂2号墳の存在もしられている。しかし新本川流域がより脚光をあびるのは、むしろ古代寺院造立期になってからである。これらの地は律令制下では備中国下道郡に属するが、高梁川右岸の小高い台地上には飛鳥期に寺院が造立される。県内最古とされるこの秦原廃寺は、一町四方の寺域をもっていたと考えられ、不動の塔心礎が今も残る。また市域内ではないが、隣町の吉備郡真備町箭田には、県内三大横穴式石室墳の一つである石室全長19.1mの箭田大塚古墳^④があり、南1kmには白鳳前半の創建になる箭田廃寺がある。巨石墳の築造とそれに続く古代寺院の造立は、これらの地域を有力氏族が本拠地としていたことを示しているといえよう。

次に経済的背景となった生産基盤についてふれてみたい。

新本川は、市域の西端の小田郡矢掛町境に発し、東流して高梁川に合す全長11kmの河川である。その支流庭木川との合流点附近までの上流部は、山あいを縫う状態で両岸域とともに平地部はない。中流域は南寄りに流走するため、左岸域に北から発して南流する小支流とが造出した平地部がひらけている。下流域にいたるとさらに東南方向に流路をかえ、やがて高梁川に合流する。この地域では高梁川の造出した微高地と合せ、高梁川右岸の市域では最大の平地を生み出している。のちに備中國下道郡上原郷となった上原、富原一帯には条里制が顕著に残り、最大の水田地帯となっている。三角縁神獣鏡を出土した備中最古の上沼古墳やおそらくそれに続くであろう秦大塚古墳、茶臼山古墳、一辺17mの方墳の金子2号墳など4世紀から5世紀前半にかけての首長墳の存在は、その背景として眼下の肥沃な水田地帯を抜きにしては考えられないであろう。また中流域の砂子山古墳群の存在は、この地域にも首長集団を輩出した生産基



第3図 遺跡周辺地形図 ($S = 1 / 8,000$)

盤の存在をうかがうことができる。こうした中、下流域の状況に比べ、上流域には前方後円墳は一基のみで農業生産基盤が劣性であったと考えられる。湿润な谷部を水田とし、周辺の埋積谷や尾根上に弥生期以降小集落を営んでいた状況が、新本川右岸流域の圃場整備に伴う発掘調査や、第2団地造成に伴う発掘調査からうかがうことができる。

しかし、この地域において注目されるのは鉄生産である。五世紀代に、幾の大王陵に比敵する造山、作山古墳をはじめいくたの巨大墳を生みだした吉備勢力は、豊かな農業生産基盤をもち、またそれに支えられた製塩、製鉄などをはじめとする分業生産が盛んであったことはよく知られている。とりわけ鉄生産の掌握は諸勢力にとって必要不可欠のものであったことはいうまでもない。

吉備の製鉄については、すでに六世紀後半に美作の大蔵池南製鉄遺跡^⑨で操業されており、また製鉄用製炭窯とされる窯状遺構の存在も、県北部では数多くの事例が報告されている。しかし吉備中枢部の県南地域においては、二、三の製炭窯の発掘^⑩が報ぜられたのみで、6～7世紀代の製鉄炉の検出にはいたらなかった。こうした状況にあって、市内久代、新本の地域の第2団地造成地内において、五ヶ所の製鉄遺跡が検出され、計60余基の製鉄炉の存在が明らかとなつたことは、大きな意味をもつであろう。当時の製鉄は、その原料を砂鉄や鉱石あるいは両者の併用という状態で行なわれたことがあきらかにされている。調査資料が未分析のため、そのいずれであったかは現段階では不明であるものの、この地域一帯は砂鉄を含む花崗岩地帯であり、そうした条件に合致している。

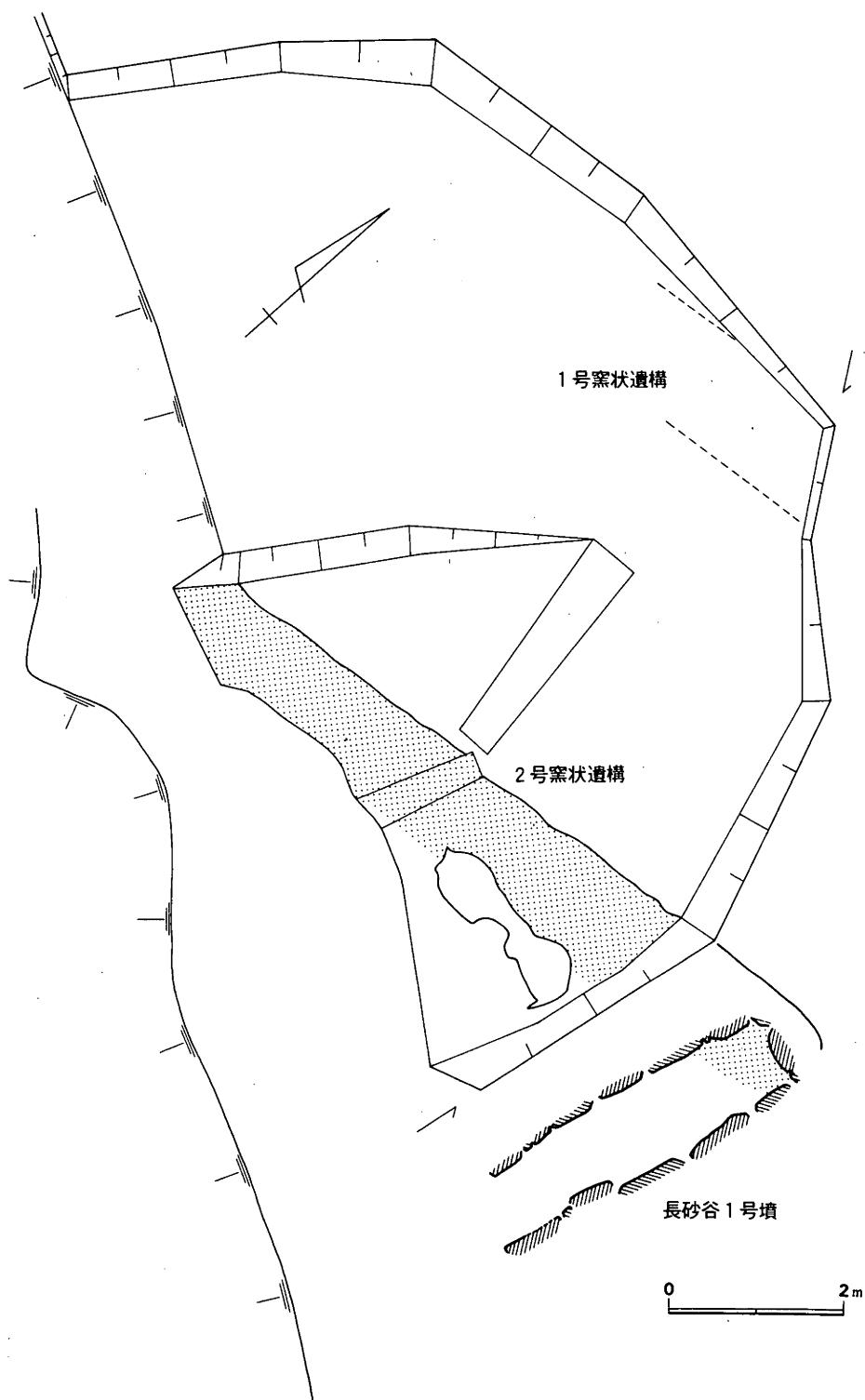
こうした状況は、農業生産において劣性な新本川上流域が、鉄生産という側面から大いに再考されなければならない地域であることを意味している。吉備の製鉄がいつ頃まで遡ぼれるのかわからないが、鉄生産の掌握を通して吉備の勢力がより巨大化していったのであろう。その吉備の中枢部ないし、その近辺における鉄生産の証明は美作におけるものとはまた異った意味をもつものといえよう。

第3章 発掘調査の概要

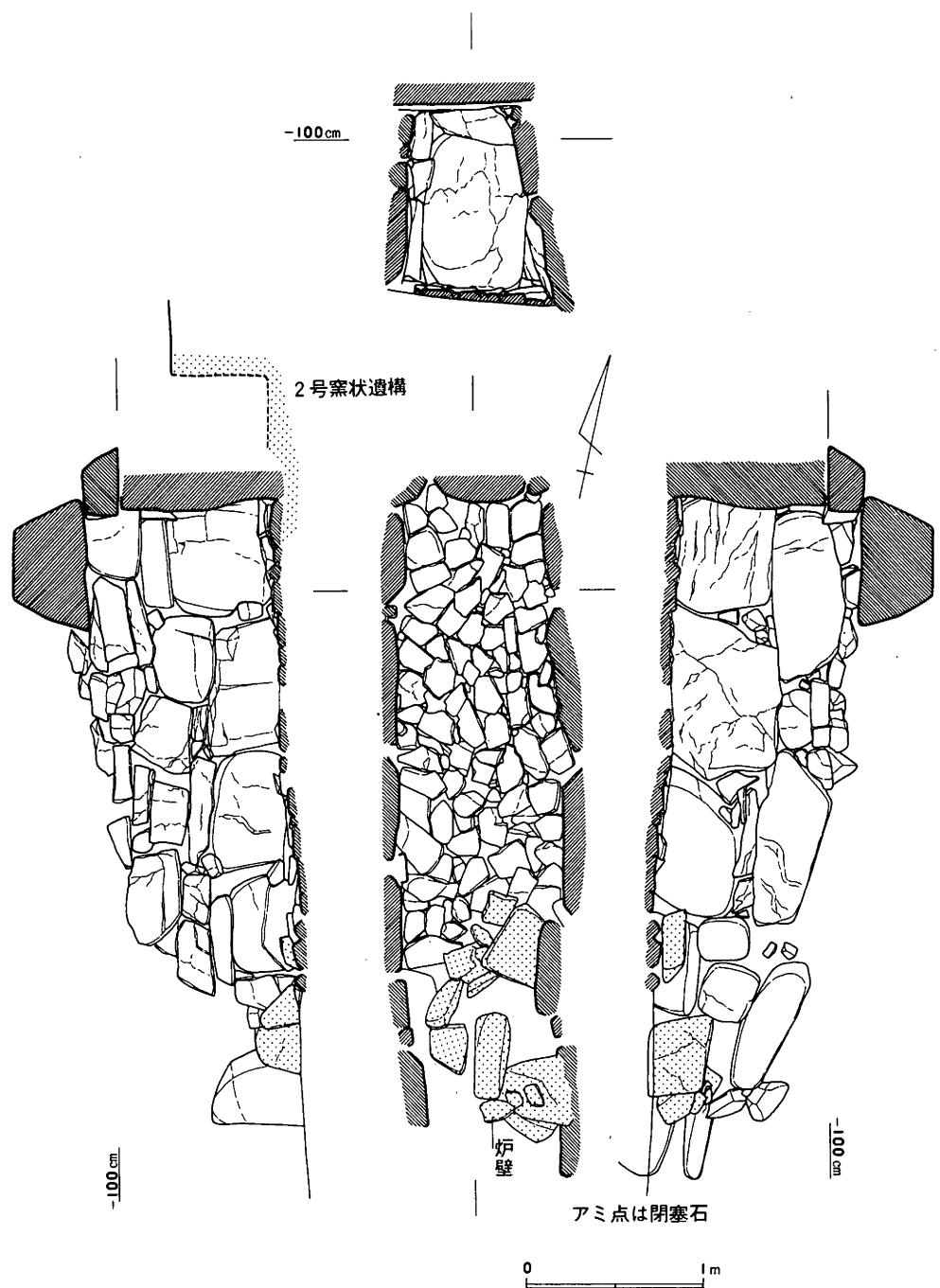
第1節 長砂谷1号墳

位置 本墳は、総社市新本5793番地に所在する。

標高196mの尾根頂部から、南にのびる小さくやゝ急傾斜な先端部に位置している。東には



第4図 遺構配置図 ($S = 1 / 80$)



第5図 石室平・断面図 ($S = 1 / 40$)

狭長な谷が入りこみ、俗に長砂谷とよばれている。前面には南東にのびる大きな尾根があり、大字布下から木村にかけて大きな谷部を形成している。

通報をうけ現地に赴いた時点ではすでに石室は開口していたが、復元的にみると窯状構造を

構築するため尾根先端部を削平して30×10mほどの半円状の平坦部をつくり出しており、窯状遺構の廃棄後古墳が築造されたものであることが一目瞭然としていた。のちに周溝が埋没し、さらに後世になってこの平坦部が畠地として利用されていたようである。このため古墳は畠地下に埋没し、古墳らしい形跡を何ら見せなかっただけで、土取りをはじめるまでその存在が確認されなかった。

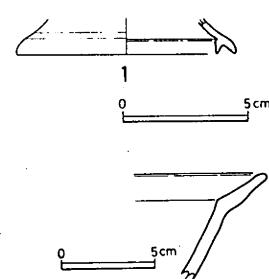
古墳の外形及び規模については、調査期間、体制ともに不十分であり、残念ながら調査するにいたらなかった。しかし石室の全長が4m弱であることからみて、規模は径6~7m前後のものと推定される。墳形については、円ないし方形が考えられるが、そのいずれであるかは不明である。

石室 内部主体は、無袖の小形の横穴式石室である。石室の全長は奥壁から開口部に向っての左側壁側で3.8m、幅は奥壁で75cm、中央部で90cm、開口部で72cmを測り、わずかに左側壁の中央部がふくらんだ形状をなす。高さは天井石の残存する奥壁部で104cmである。石材は花崗岩の転石を用いている。奥壁は二段、側石は三段積みである。奥壁の基底石を据え、側石は広口面を横長に用いて奥壁の基底石のレベルまで二段に積み、さらに奥壁二段目を架したあと側壁の三段目を積みつつ天端高の調整をしている。右側壁側はほど直立に近いが、左側壁側はやゝ内傾する。床面は板状の石材を用いて石敷とする。比較的丁寧につめ合わせており、ほど右側壁の四石目まで、左側壁の三石目までに認められる。石敷きの途切れるあたりに閉塞石の一部が残存している。床面は中央部まではほど水平に、それより開口部にかけてはやゝ下降し、また右側壁側から左側壁側にやゝ傾きをみせている。天井石は、一石のみ残っているが、除去された枚数から本来六枚で架構されていたようである。閉塞石は、やゝ大形の石材を用いたものがみられ、下部のものが僅かに残っている。閉塞部あたりの側壁は、残存状態が悪いがやゝ粗雑な積み方で、玄室と羨道の区別はないもののそうした意識が石積みに残されているような印象をうける。

出土遺物 石室内は、開口部周辺では現存する側壁天端高まではほど一杯に土砂が充満していたが、奥壁部に向うにつれ漸減し、奥壁部では床面高より30cmほどが埋った状態であった。

しかし遺物は、奥壁より1mほど開口部寄りで遊離出土した須恵器(1)と、中央部寄りの流入土中より土鍋(2)が、また開口部の閉塞石中より炉壁片が出土したのみで他に遺物はない。

1は1cm角大の細片で、口径もあくまで推定値である。須恵器杯蓋と考えられるが、あるいは杯身の可能性もある。口縁部内面にかえりをもち、かえりの先端部と口端部はほど同高である。



第6図 出土遺物

2は土鍋で扁平な球形状の内湾する体部をもち、口縁部は外反してくの字状となり、内面に稜をもつ。調整は、外面は縦位の、内面は斜位の刷毛調整である。

炉壁 15×20cm大の破片で、内面は熔融した状態である。古墳の周辺には窯状遺構が存するものの、その破片とはあきらかに異なるものであり、製鉄炉の炉壁片であることは疑いない。古墳にしばしばみられる鉄滓の供献と同じ目的で供えられたものであろうか。

おわりに

本墳は、尾根先端部の造成面に位置する径6～7m前後の小墳で、全長3.8m、最大幅90cm高さ104cmの小形の横穴式石室をもつ。おわりにあたって出土した須恵器杯蓋と石室の規模、構造から築造時期について考えてみたい。

杯蓋は杯身の可能性も否定できないものの、その諸特徴からみて陶邑編年^①でいうTK217～TK46前後の時期が考えられよう。また横穴式石室も小形で無袖であり、後出的要素の強いものであって、杯蓋の編年観とも矛盾しないであろう。従って本墳の築成は、窯状遺構の廃棄後の七世紀中葉ないしそれより多少古い時期と考えておきたい。

第2節 長砂谷製鉄関連遺跡

今回の調査では、横穴式石室をもつ小墳と共に製鉄用製炭窯とされる窯状遺構も検出された。

石室発見時には、古墳の西側が12×8mほどにわたって削平され、窯壁片と思われる焼土塊が散乱していた。一ヶ所は古墳の6mほど北西側のところである。この部分はすでに床面も含めてすべての部分が削平されており、わずかに掘削された土層断面にその様相をうかがうことができた。これを1号窯状遺構と呼称することとした。焼土塊の散乱が著しいのは古墳に隣接した西側で、これを2号窯状遺構とする。その後周辺の調査から、古墳の北東約30mほどの地点に窯壁片が数片散見された。小規模ではあるが地形の削平の状態からみても窯状遺構の存在は疑いない。これを3号窯状遺構とした。ただこの部分は今回の削平予定地には含まれておらず、現状のまま保存されている。

1号窯状遺構



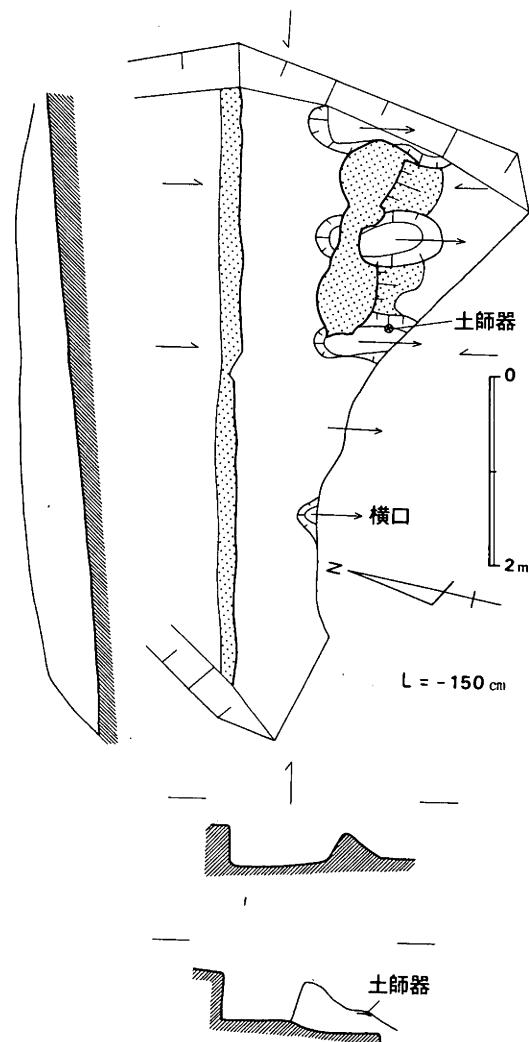
削平部分の断面の清掃の結果、地山を現存計測幅約1.8m、深さ80cmほどの掘り込みが認められ、部分的に焼土塊が残存していた。しかし壁面を削りだすごとに焼土塊は消失する傾向にあった。削土をした森川氏によると、2号窯状遺構とはゞ平行状態に数mにわたって同種の焼土塊が認められたとのことである。こうしたことから、1号窯状遺構は2号窯状遺構とはゞ平行する状態で存したものと考えられる。なお僅かに残存した掘り込みの断面の状況は、煙道近くの作業穴のある部分を反映しているものと考えられる。

2号窯状遺構

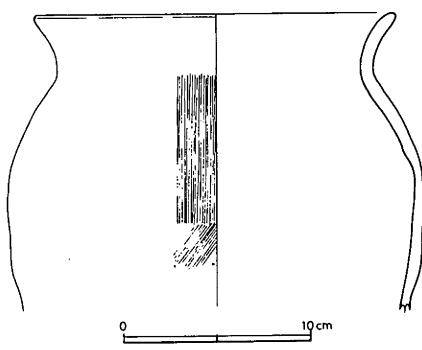
等高線と平行のはゞ東西方向に存する。調査時には、すでに焚口近くの1/3位の横口部分が削り取られた状態で発見された。残存部の計測値は、長さ約9m、幅約1m、最大壁高60cmである。長軸側の一方の壁面は比較的よく残存しているが、横口側は焚口周辺は削りとられており、中央部分が残存している。しかし煙道に近い側は、石室の奥壁の裏側にあたり、調査期間の制約もあって未調査のため不明である。横口は5°穴が確認された。床面は青灰色によく焼けており、鉛状を呈していた。傾斜角は5°である。床面には炭をはじめ何らの遺物も検出することができなかった。しかし横口の一つから、底面より20cmほど浮いた状態で土師器甕片が出土した。なお1、2号窯の先後関係については、削土面の清掃から1号窯の廃棄後2号窯が築造されたものである。

出土遺物

口径19.2cmの土師器の甕である。底部を欠くが、やゝ長胴ぎみの胴部をもち、口縁部は外反してくの字状を呈す。外面の上半は縦位の、その下方は斜位



第8図 2号窯状遺構 (S=1/80)



第9図 出土遺物

のハケ目調整が施される。内面は成形の際の指頭圧痕が残り、ナデが施されたものである。

おわりに

今回の調査は、種々の制約のため十分なものとはなり得なかった。しかし、製炭窯とされる窯状遺構の廃棄後、終末期の横穴式石室墳が築造されたという事実関係の把握は、大まかとはいえ窯状遺構の時期を考察するうえで興味深い。このよう

な事例は津山市鮎込遺跡^①、総社市久代の第2団地遺跡群内の沖田奥6号墳と3号窯状遺構についても確認されている。沖田奥6号墳の築造は、7世紀前半と考えられるものである。第2団地造成地内の調査においては、16基の窯状遺構が調査されたが、その時期が下限を示すものとはいえる確認されたものは1基にすぎない。津山市鮎込遺跡における古墳の築造は、7世紀後半と考えられており、三例ともほど近接した時期を示している。以上の三例のみをもって判断することには、なお慎重さを要すが、製炭窯とされる窯状遺構が、少くとも7世紀前半以前に存在していたこととなる。その時期は、これまでのところ日本最古とされる岡山県久米郡久米町の大蔵池南製鉄遺跡の操業期に重複するものとなる。おそらく各地で横穴式石室が盛んに築造された時期には、この種の窯状遺構が活動していたのであろう。鉄づくりにあたって、木炭は不可欠のものであり、製炭窯が存在したことはあきらかである。製炭窯とされるこの種の窯状遺構は、遺物を伴うことは殆んどなく、速断は避けなければならないが、その存在の時期はかなり限定されたものであるらしい見通しができそうである。こうした意味で、大まかではあれ今回下限の時期が与えられたことは、意義あるものといえよう。

註

1. 兼康保明「古代白炭焼成窯の復元」『考古学研究』第27巻第4号 1981年
2. 1986年2月～1987年8月にわたり、第2団地造成地内で集落跡3、古墳36、製鉄遺跡5の発掘調査が行われた。特に製鉄遺跡では、製鉄炉約60基、窯状遺構16基が検出され注目された。報告書未刊。
3. 永山卯三郎『吉備郡史』巻上 1937年
4. 中野雅美『箭田大塚』 真備町教育委員会 1984年
5. 森田友子「大蔵池南製鉄遺跡」『稼山遺跡群IV』 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982年
6. 浅倉秀昭「和田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42』 岡山県教育委員会 1981年
中野雅美氏の教示によれば、山陽自動車道建設に伴う菅生遺跡(倉敷市)の調査で1基検出されている。

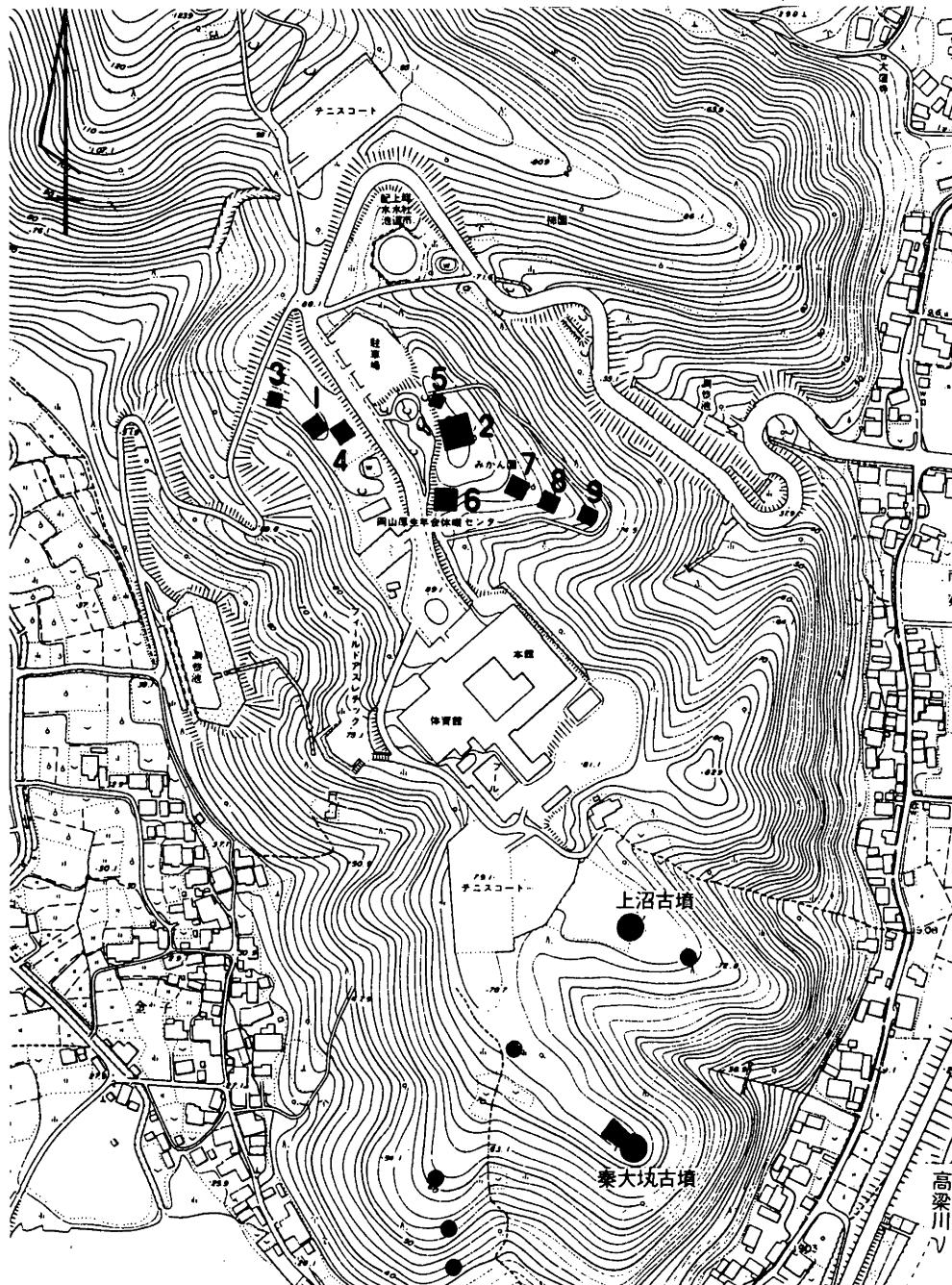
総社市内の各遺跡については、主として『総社市史』考古資料編を参考した。他に葛原克人「古墳時代前期」『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年

間壁忠彦、間壁葭子「岡山」『日本の古代遺跡23』 保育社 1985年

7. 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

8. 津山市教育委員会 安川豊史氏の御教示による。

脱稿後、総社市小寺の報恩寺墓地造成に伴う青谷川2号墳の調査で、同種事例を確認した。



第10図 金子古墳群位置図 ($S = 1 / 5,000$)

付載 1 岡山厚生年金休暇センター改修に伴う 金子古墳群の整備について

1974年の秋頃、高梁川右岸の正木山支脈の尾根上を中心に、「厚生年金総合老人ホーム」の建設が計画された。計画地は広範囲に及び、かつて三角縁神獣鏡を出土した備中最古の秦上沼古墳、全長56mの前方後円墳秦大塙古墳などを含む地域であった。このため県教育庁文化課は直ちに計画地内の遺跡分布調査を実施し、その成果をもとに協議を重ね、上沼古墳、大塙古墳を含む地域を計画区域から除外し、金子2号墳と呼称した一辺約17mの方墳については緑地公園に取り込んで現状保存することとなった。したがって事前に発掘調査を要したのは金子1号墳とよばれる小墳1基と、その調査途次に古墳の残骸が検出された3号墳の2基であった。しかし時間的制約から調査は内部主体を中心としたものとなった。なお1号墳はその後の計画変更により調査後、現況のまま残されることとなった。ただし3号墳は法面工事に際して消失した。この間の経緯については総社市史考古資料編掲載の秦金子古墳群を参照されたい。

また施設は当初の総合老人ホーム構想が変更され「厚生年金休暇センター」として建設され、今日にいたっている。

1987年になって、同施設の内装関係を中心とした改修が計画され、それに関連して金子1、2号墳の整備がはかられることとなった。保存整備工事は、県教育庁文化課、岡山県古代吉備文化財センターの助言をうけ、総社市教育委員会が指導を行って実施した。

以下に整備の概況を記すこととする。

整備にあたって、進入路東側の2号墳周辺は松林を%程度を間伐し、伐根して芝付けを行うこととなった。この地域で伐開中に新たに4基の方墳と墳形不明の小墳1基、また進入路西側の1号墳に隣接して方墳1基、の計6基が新規に発見された。これら6基は幸い緑地整備地内であり、1、2号墳と同様の整備を行った。

事業は1987年12月から翌年3月にわたって行われた。

1号墳

先述のごとく、1974年の調査は期間の制約から内部主体を中心としたものであった。その概要是、東西8.3m、南北8.1mの方墳と考えられ、墳丘中央部に1基の箱式石棺が検出された。規模は内法長2m強、幅32~40cm。床面は土床で、人骨は残存せず、棺内から須恵器1、滑石製紡錘車2、鉄鎌1、不明鉄器1が出土した。5世紀の第3四半期の築造と考えられている。

本墳の整備にあたって問題となるのは、墳形と規模である。このため前回調査時に設定されていた東西南北の四方向のトレンチ間に補助トレンチを設けると共に、北東及び南東側にはさ

らにトレンチを設けて、全体を放射状のものとした。この結果、本墳は南西部がいびつな一辺約9mの方墳であることが判明した。

箱式石棺の整備にあたって、調査後から今日までの間に六枚の蓋石のうち一枚が欠失していたので、西側の二枚を架せて墳丘を復元し、残存する三枚は墳丘上に並べ置いて棺内が観察できるようにした。なお墳丘のみ芝張りとし、棺内、周溝内とも排水施設を新たに設けた。

2号墳

前回調査時においては、事前協議によって現状保存の方向がうちだされていたため、墳形測量および墳端確認の小試掘にとどまった。その結果本墳は二段築成の方墳で、一辺16~17m、高さ2m強の規模であったと考えられている。蓋石が部分的に残り、墳頂部中央には盗掘塹がうがたれていた。

整備にあたっては、墳頂部盗掘塹の埋め戻し、南東角の墳丘復元を中心として行ない、墳端確認のため前回調査時のトレンチを中心に、一部新たに設定して墳端および周溝の確認につとめた。盗掘塹については、埋め戻し前に盗掘塹全体の埋土を排除し、内部主体の種類と遺物の検出につとめた。盗塹の規模は、上面で3m、下面で0.8m、深さ1.3mにおよんでいる。墳丘は地山を一部整形したのち盛土したもので、盛土高は約1mを測る。盗掘塹部分からは、内部主体とみられる施設はその痕跡も含めて何ら検出されなかった。従って内部主体は、墳頂部中心をややはざれた位置に存するものと考えられる。盗掘はコーラ缶などの出土から1950年代の後半以降に行われたものであろう。墳端に設けた小トレンチから、北、西、南の三方向に幅60~80cm前後、深さ30cm前後の浅い皿状の周溝が、それぞれの傾斜の高い側部分に各辺とも半分強ほど存することが判明した。なお南側の周溝から須恵器甕の細片が出土した。

3号墳

工事中消滅。

4号墳

1号墳の南東に隣接して発見された。傾斜の高い北、西、南の三方向に浅い周溝をもつ一辺約6mの方墳と考えられる。墳丘の高まりはわずかで、自然傾斜面と殆んど識別できない位である。ボーリング棒探査によると箱式石棺らしい石材の存在が確認される。

5号墳

2号墳の北24mの尾根上に所在するもので、新規に発見された。墳丘の北側が遊歩道工事によって削平されているため、墳形、規模は現況からは判然としないが、この地域の古墳が方墳で構成されている状況からすれば、本墳も方墳の可能性が高い。遊歩道の建設時に墳丘が削平されたため、石材二個が露出しており、箱式石棺の蓋石と小口寄りの側石であることが判明した。厚生年金休暇センターの職員によると、数年前に地元の中学生によって側石がはずされ、

一部盗掘されたとのことで、棺内的一部分は空洞状となっていたが、他の部分は土砂が充満していた。

6号墳

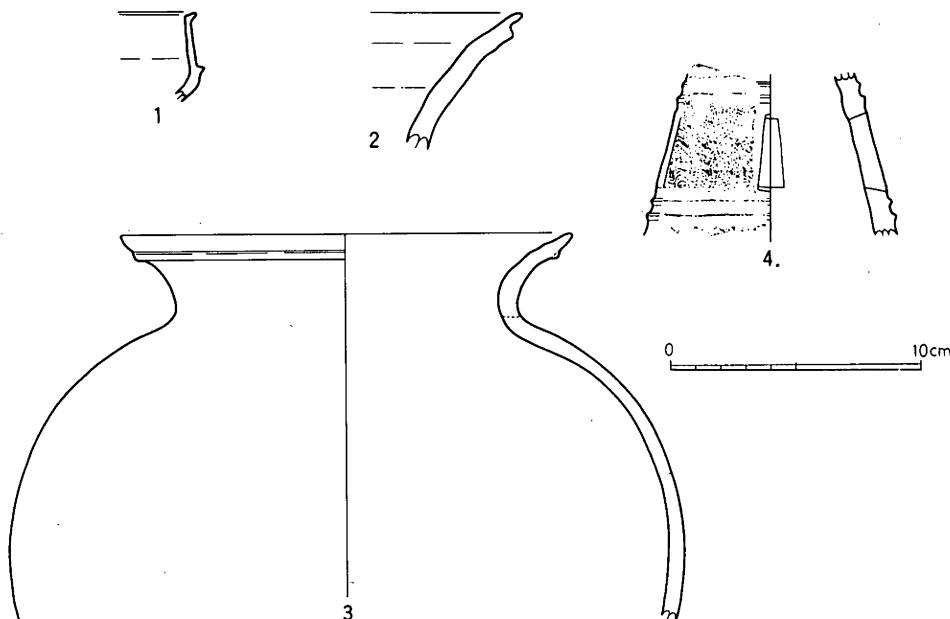
2号墳の南40mで新規に発見された。一辺約11m、高さ1.8mの方墳。傾斜の高い北側には埋没した状態であるが周溝が確認される。西側はさつき園となっているため、周溝が存したかどうかは不明。墳頂部には、3m大の大きな盗掘塹があり、凹部となっている。整備にあたって、この盗掘塹を清掃し、内部主体の確認のため盗掘塹内の東西方向に幅30cmの小トレンチを設けた。人頭大前後の花崗岩が数ヶ検出された。竪穴式石室の控え積みの石材の可能性が考えられるが、調査が小規模であるため、速断はできない。

7号墳

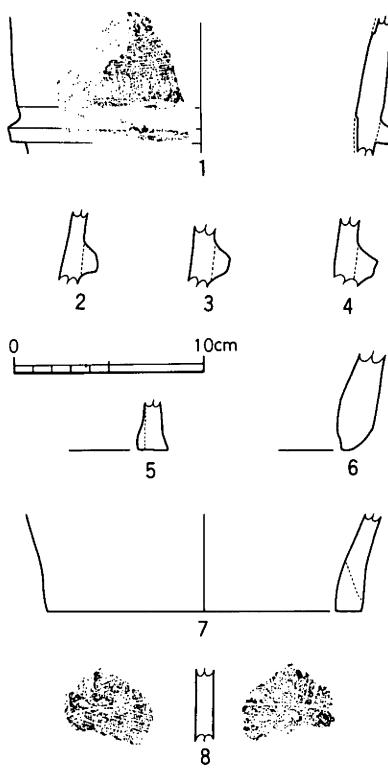
2号墳の南西約44mに、本墳をはじめ8、9号墳の三基が並列している。本墳は、現况からも方墳であることが比較的容易に確認される。一辺約10m、高さ1.5mを測る。山側には幅2mほどの周溝が凹部として確認される。小雑木の伐根に伴って須恵器や円筒埴輪片が少量出土した。

7号墳出土遺物

円筒埴輪 いずれも小碎片のため、径の算出は修正を要するものを含んでいる。また剥離、磨耗が著しく、調整が不明なものが多い。底径の算出できるのは16.6cmで、底部から口縁部へ向って開く形態である。全体の高さ、段数などの判明するものはない。タガは台形状を呈し、



第11図 7号墳出土遺物



第12図 7号墳出土遺物

須恵器 1の杯身は1cm角大の小片である。高い直立状のたちあがりをもち端部はわずかに凹面をなす。淡青灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。2はゆるやかに外反する口頸部をもつ甕である。色調は内外面が暗青灰色、断面は赤紫色で、精選された胎土を用い、硬質に焼成されている。3の甕は $\frac{1}{3}$ ほど残存している。口径18.0cm。球形の体部から口頸部はゆるく外反し、端部はまるく仕上げ、にぶい断面三角形の凸帯をもつ。淡灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。4は $\frac{1}{6}$ ほど残存する器台である。小破片のため径や傾きに修正を要すかもしれない。上、下に二段の凸帯をもち、長方形状の透しを穿ち櫛描波状文で飾る。内外面とも暗青灰色だが、断面は暗赤紫色を呈す。硬質の焼成である。

以上の須恵器各種は、時期差を含むものであり、表採という状況も併せ考えねばならないが、初期須恵器とそれに続くものとしてとらえられよう。

8号墳

7号墳の下方16mに所在する。墳形は、7号墳ほど明瞭ではないが、方墳の可能性がきわめて強い。一辺約8m、高さ1.2mほどである。山側にのみ周溝が凹部として認められる。

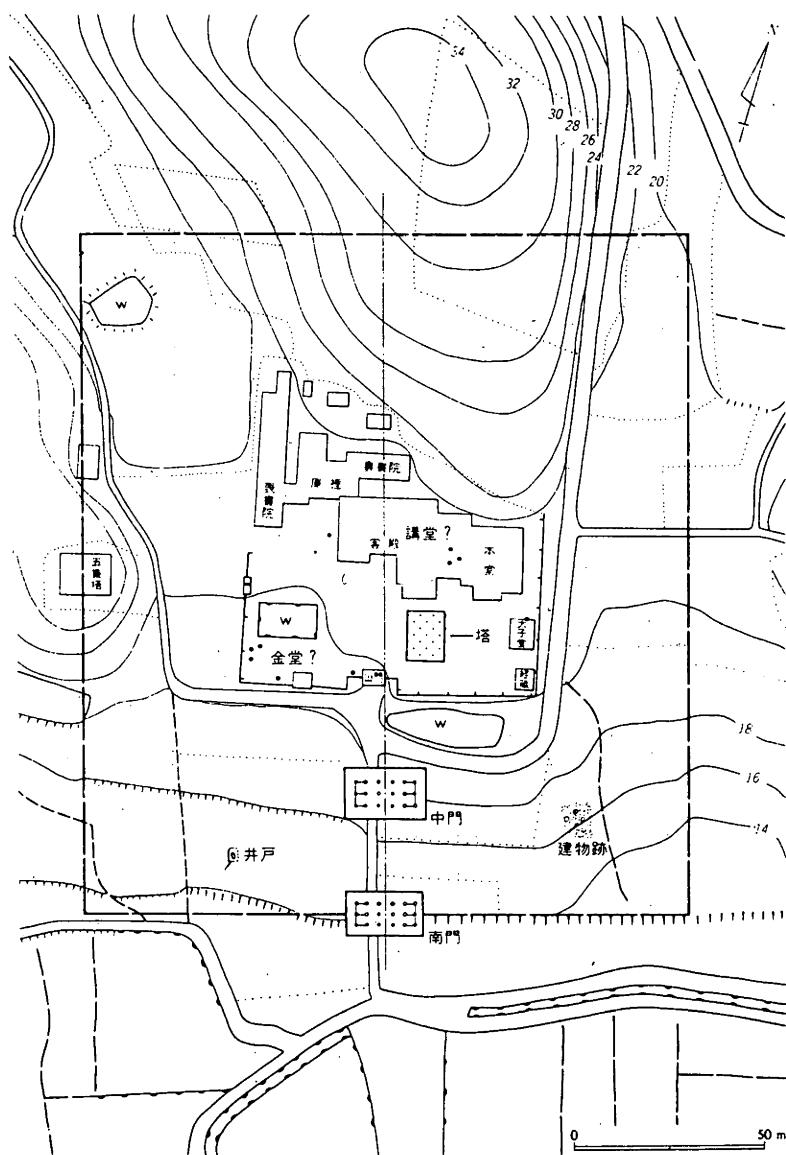
9号墳

8号墳の下方15mに所在する。墳丘の高まりは認められるものの、墳形はあまり明確でないが方墳とみてよさそうである。一辺約7m、高さ0.7m位の規模と考えられる。

金子古墳群は、今回発見された六基を含め、九基で構成されることとなる。これらのうち3

号墳は法面工事により消滅しており、1号墳は内部主体の箱式石棺が調査されたほか、他は現状保存となっている。すべての古墳の調査の発掘調査が行われたわけではないので即断はさしひかえなければならないが、方墳で構成される前期古墳群と推定される。これらの古墳のうち1、2、7号墳は須恵器を伴うものであることとみて5世紀中葉以降に築造されたことはあきらかである。三角縁神獣鏡を出土した上沼古墳、ついで全長56mの前方後円墳である大塙古墳が首長墳として築造され、その系譜上に2号墳が位置するであろう。

最後に本古墳の整備にあたって葛原克人、光永真一両氏より指導、助言をうけたことを記し、謝意にかえたい。



第13図 備中国分僧寺跡平面図

付載2 地中レーダー探査による 備中国分寺塔跡の確認調査

備中国分寺は、尼寺とともに聖武天皇の発願を契機に造立された官寺である。天平の甍とうたわれた栄華も平安時代以降は急速に衰微し、延元元年（1336）の足利尊氏の東上途時の福山合戦の際焼失したとされている。その後この地に重複して、17世紀の前半頃に増鉄和尚によって日照山国分寺として再建され、本堂、客殿、書院、太子堂、五重塔などが順次整備され、今日にいたっている。従って創建時の名残りを留めるものは、境内に散在する十数個の礎石ぐらいであり、廃絶後再建されぬまま今日にいたっているため、伽藍配置の様子をよく残している備中国分尼寺とはきわだった対照をみせている。

昭和46年、岡山県教育委員会による発掘調査が実施され、創建時の国分寺の一端があきらかとなった。その内容を総社市史考古資料編の葛原克人「備中国分僧寺跡」に拠って記すと、寺の軸線は16度西に偏し、築地によって画される伽藍地は東西550尺、南北600尺とされる。南門は5×2間、その北32mに位置する中門は南門よりやや大きい5×2間の規模である。しかし金堂、講堂、塔などの主要伽藍は、現国分寺の建物等と重複しており、また発掘が現在の境内地を除く範囲であったため不明で、敢えて推論すれば法起寺式の可能性が高いとされている。

ところで備中国分寺跡は、昭和42年に国指定となっており、また昭和55年に国指定となった五重塔は、県内に現存する19塔のうち唯一の五重塔であり、吉備路観光のシンボルとして四季を問わず多くの人々が訪れている。さらに一部県指定の現国分寺建物群の存在を考え併せると創建時主要伽藍の追求はきわめて困難な状況にあるといわざるをえない。

総社市教育委員会では、昭和63年6月に史跡整備に伴う主要伽藍の配置状況確認のため、柏寺廃寺の発掘調査を実施した。柏寺廃寺は、吉備の雄族賀夜氏の氏寺ともされる白鳳期創建の古代寺院である。周辺の急速な宅地化に伴い、昭和52・53年の兩年度にわたって岡山県教育委員会による発掘調査が実施され、12.9mの瓦積基壇をもつ塔跡の存在が確認されている。しかし、他の伽藍は後世の賀陽山門満寺本堂、庫裏、開山堂、長屋などの建物があったため制約された調査となり不明であった。そこで今回の調査にあっては事前に地中レーダー探査を行って基壇等の検出につとめた。その報告は機会を改めて行う予定である。

さて、今回柏寺廃寺のレーダー探査終了後、調査業務を委託した非破壊検査株式会社の好意により、備中国分寺境内において同種の探査を行った。

創建時の備中国分寺は、法起寺式の伽藍配置が想定されており、講堂は現国分寺建物群と重複、金堂は貯水池により削平されていると考えられるため、時間的な制約も考慮して塔跡の検

出を目的として行った。

探査は、当初創建時代の礎石が転用されている太子堂の西を中心として行ったが反応なく、ついで中軸線寄りの西方に移動したところ、基壇らしいたかまりを確認した。さらにこのたかまりの中央部に大形の土塙らしいくぼみと、その周辺で根石らしい石材および土塙を確認することができた。たかまりは、現況で東西約10m、南北12.5mほどである。北辺は端の土塙から2mほど残っており、そこから東西方向に幅2mほどの溝状の凹部となる。南辺の残存もほぼ2m前後である。

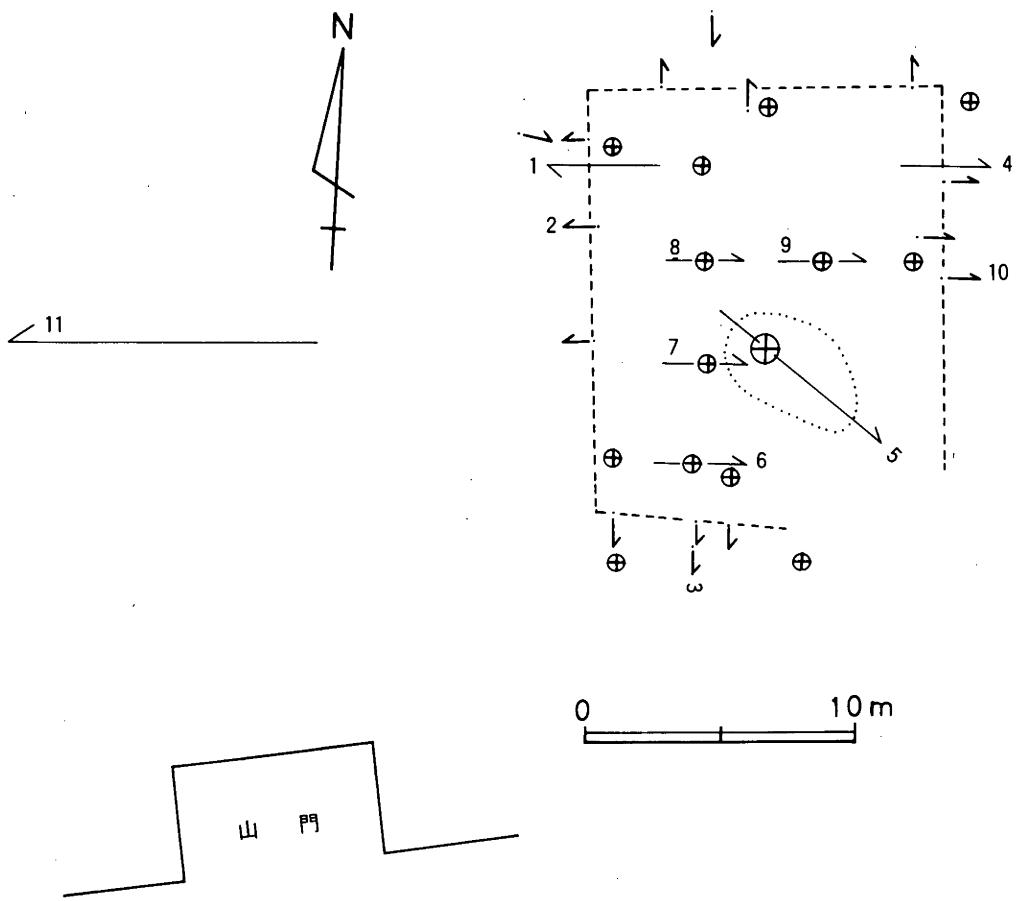
このたかまりは、塔の推定位置、規模、のちに述べる心礎抜取穴などからみて塔基壇と考えられ、その規模は復元的にみれば、一辺約13m前後となる。基壇の中央部には、北西から南東に長い2.5×4mほどの穴があり、北西部側は一段深くなっている。穴の規模と石材の存しないことからみて、心礎抜取穴とみてよからう。ところで塔の場合、建物は3×3間規模と考えられるから、礎石を据えるための土塙は16穴となる。このうち、時間的制約もあってすべての検出はできなかったが8穴が確認され、うち5穴には根石らしい石材も認められた。柱間はレーダー探査による検出が、穴の中央部をずれている場合もあるが、検出状況からおよそ9尺前後と考えられる。

この塔基壇は、中門より約33mほど北にあり、中軸線より約14mほど東よりに中心部をもつ位置となる。なお、塔基壇より西方へ移動したところ、山門に入った中軸線あたりは攪乱のない整然とした土層であったが、金堂が推定されている貯水池の近くで大きな掘り込みがみられた。おそらく当初素掘りの池が、のちに縮小されて現在の石積みの貯水池になったのであろう。

従って金堂址については貯水池、樹木、碑などが存する現況から、レーダー探査はできなかった。

今回のレーダー探査は、制約的な条件下のものであったが、塔跡の確認ができ、発掘困難な地での規格性の高い遺構については有効な方法であることを確認したことは意義深い。

最後に、貴重な時間を割いて探査を実施していただいた非破壊検査株式会社の御好意と藪下、林両氏の献身的な協力に深甚の謝意を表します。



第14図 地中レーダー探査位置図

付載 3 鬼ノ城 第Ⅱ群礎石建物群表採の平瓦について

鬼ノ城は、総社市奥坂に所在する規模壮大な古代山城跡である。

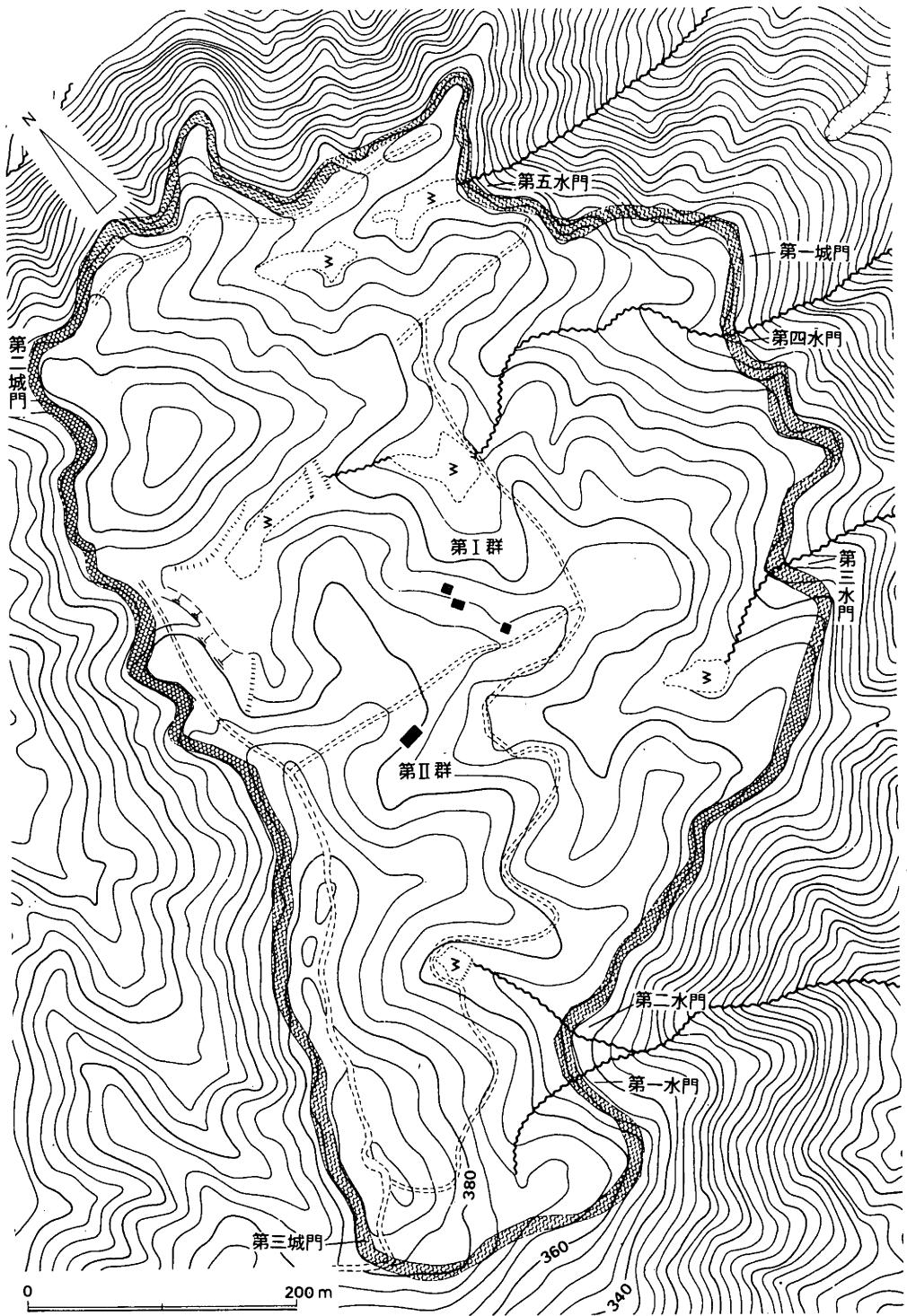
吉備高原の南縁、標高390余mの鬼城山は、前面は急峻な斜面をなし、天陥要害の地となっている。一方背面は緩やかな斜面をなし、頂部は広大な平坦面で、あたかも擂鉢を伏せたような山容を呈している。この鬼城山の八合目から九合目にかけて、下部は石塁、上部は土塁からなる城塁が、全長約2.8kmにわたって鉢巻状にめぐる。谷部には五つの強固な水門が構築され城門も三ヶ所に推定されている。城内はおよそ29haに及ぶ広大なもので、これまでに二地区で数棟の礎石建物が発見されている。

礎石建物群は、城内のほぼ中央に所在する。遊歩道を挟み、北側（第Ⅰ群と仮称）に3棟、南側（第Ⅱ群）に1～2棟が確認されている。建物は、緩斜面をL字状に削平して平坦面を造成し、花崗岩の自然石を用いて礎石とする。第Ⅰ群の建物1は3×3間で桁行732cm、梁間は560～612cmを測る。建物2は、建物1の北15mにあり、建物1よりやや小さい3×3間規模である。建物3は、建物1の南30mにあり、3×3間規模である。なお建物1と3の間に間口25m、奥行11mの造成面があり、数個の礎石が検出されたが、埋没しているため規模不明である。大型建物1棟か、普通規模のもの2棟が存在するらしい。第Ⅱ群は、間口30m、奥行11mの平坦面をもち、基壇化粧には花崗岩の自然石が用いられ、それが25mにわたって検出される。礎石は数個が認められ、西側のものは心々距離300cmを測るが、東側のものはこれよりやや狭い。おそらく2棟の存在が考えられる。

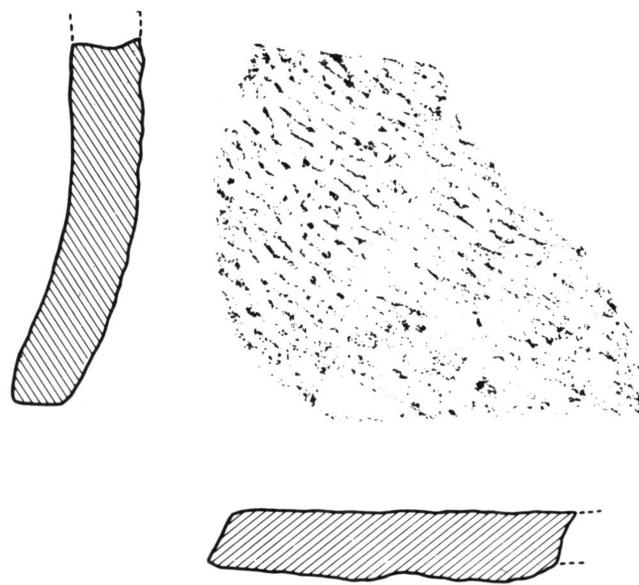
ここに紹介する瓦は、1988年3月10日第Ⅱ群の基壇内から、総社市職員秋山律郎氏が採集したものである。採集地は、基壇のほぼ中央あたりとのことである。

瓦は、10cm大ほどの縄目叩き平瓦で、大部分が露出していたため磨耗が著しい。縄目は、5cmあたり14条ほどでやや粗い。凹面は、粗い布目痕が僅かに残存している。側部はまっすぐに面取りされている。厚さは、1.7～2cm位で、胎土は2～3mm大の砂粒をかなり多く含んでいる。暗褐色を呈し、焼成は良い。

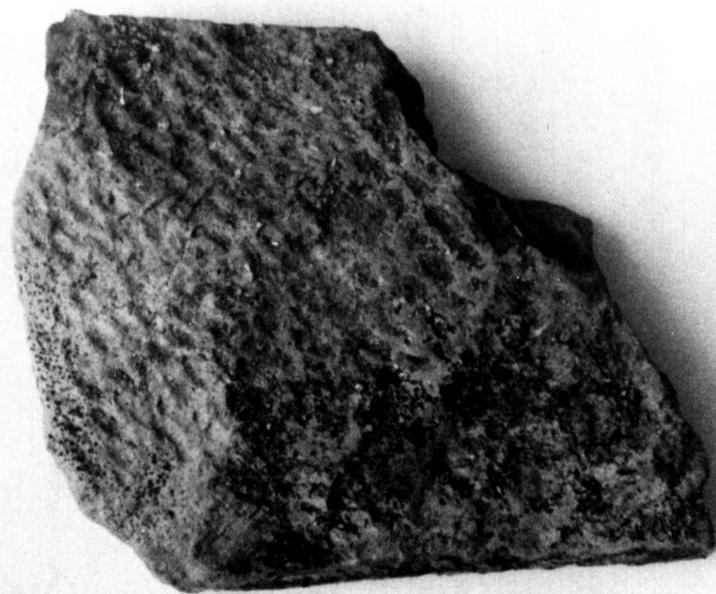
鬼ノ城の築城時期については不明だが、これまでの採集遺物から七世紀第2四半期から八世紀後半のものが知られている。これらの遺物と瓦は、その諸特徴からみて矛盾はなく、この瓦が礎石建物に葺かれていたものと考えられよう。



第15図 鬼ノ城平面図 ($S = 1 / 5,000$)



第16図 鬼ノ城第II群礎石建物表採平瓦 (S = 1 / 2)





1. 遺跡遠景



2. 遺跡近景

図版 2



1. 古墳周辺の掘削状況

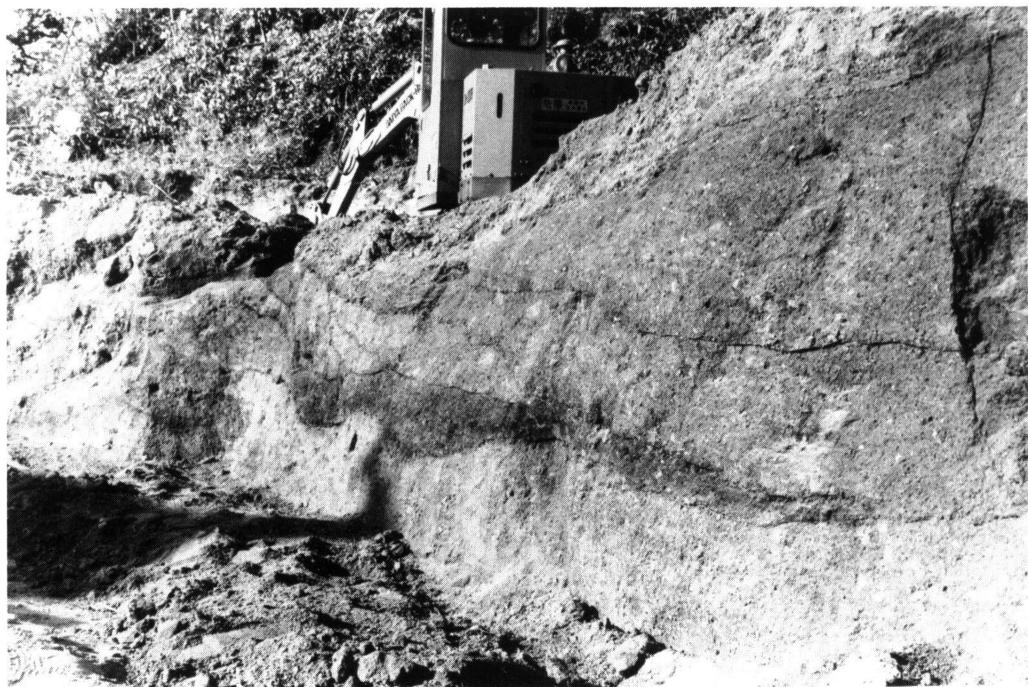


2. 調査前の古墳

図版 3



1. 開口した状態の横穴式石室



2. 墳丘土層断面

図版 4



1. 調査後の古墳全景



2. 石室内の状況



1. 閉塞部と床面

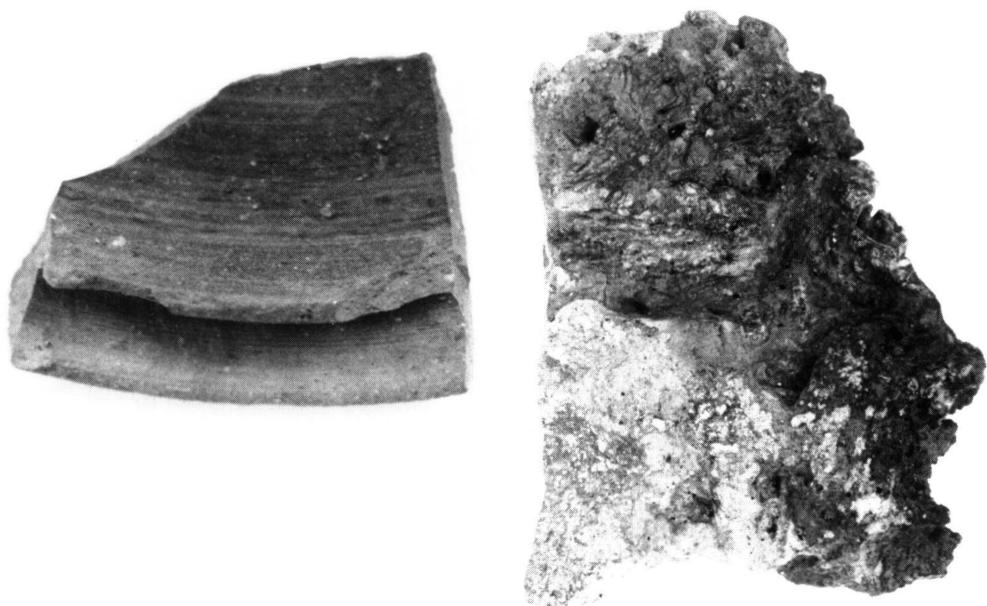


2. 奥 壁

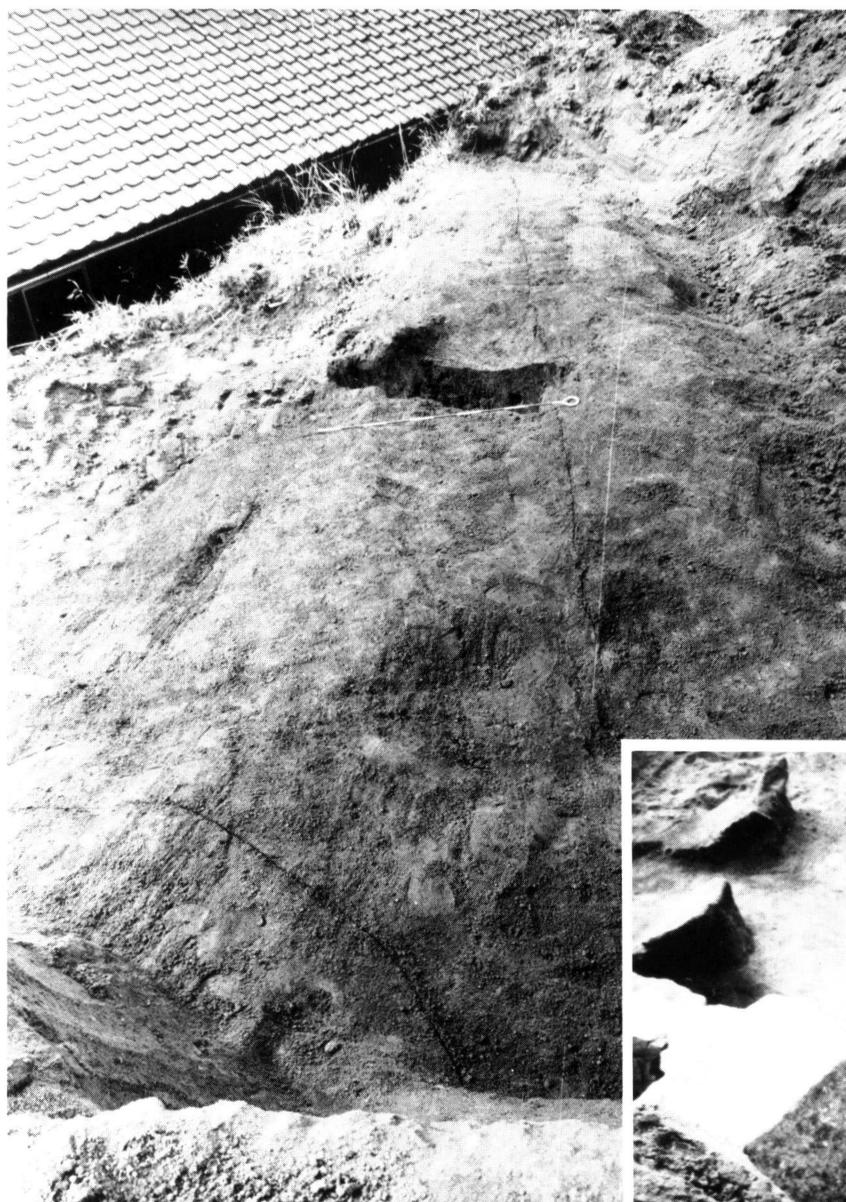
図版 6



1. 古墳と窯状遺構



2. 出土遺物

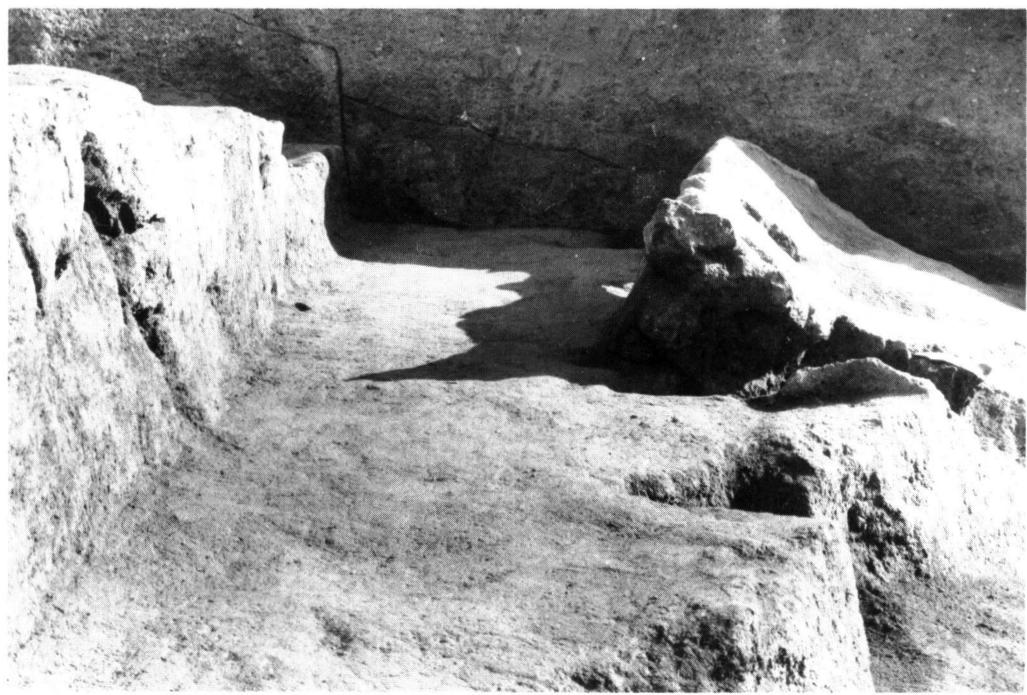


窯状遺構の検出と掘り上がり状況

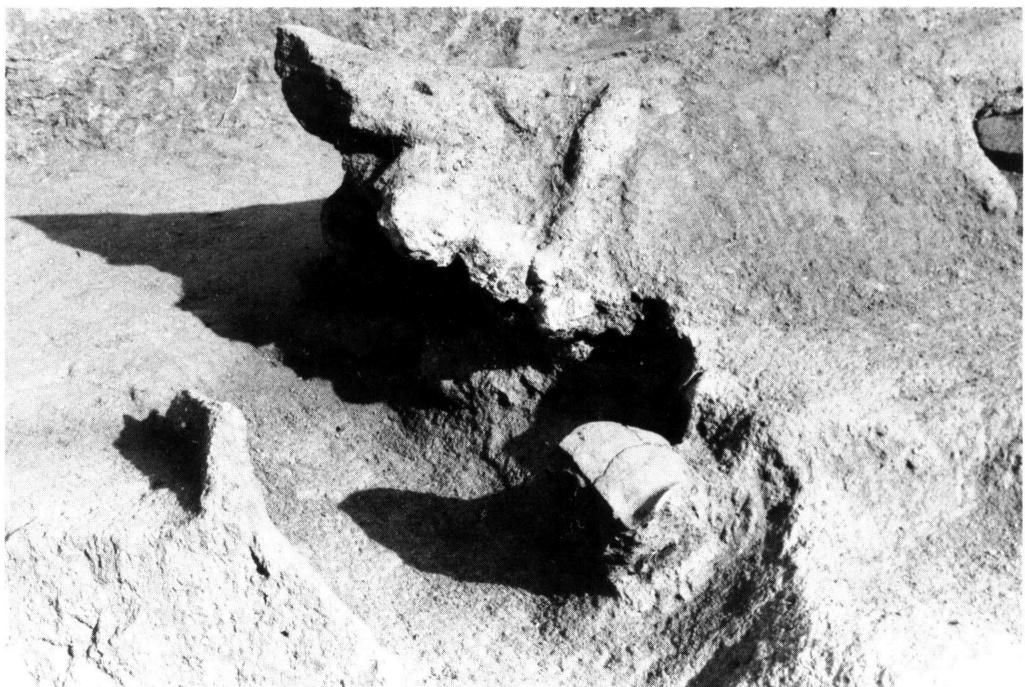
図版8



1. 窯状遺構の横口部



2. 窯状遺構の床面



1. 土師器甕出土状態



2. 1号窯状遺構土層断面

図版10



1. 金子2・6～9号墳遺景



2. 金子1号墳整備状況（手前は4号墳）



1. 金子1号墳箱式石棺整備状況



2. 金子2号墳整備状況

図版12



1. 金子2号墳（南東から）

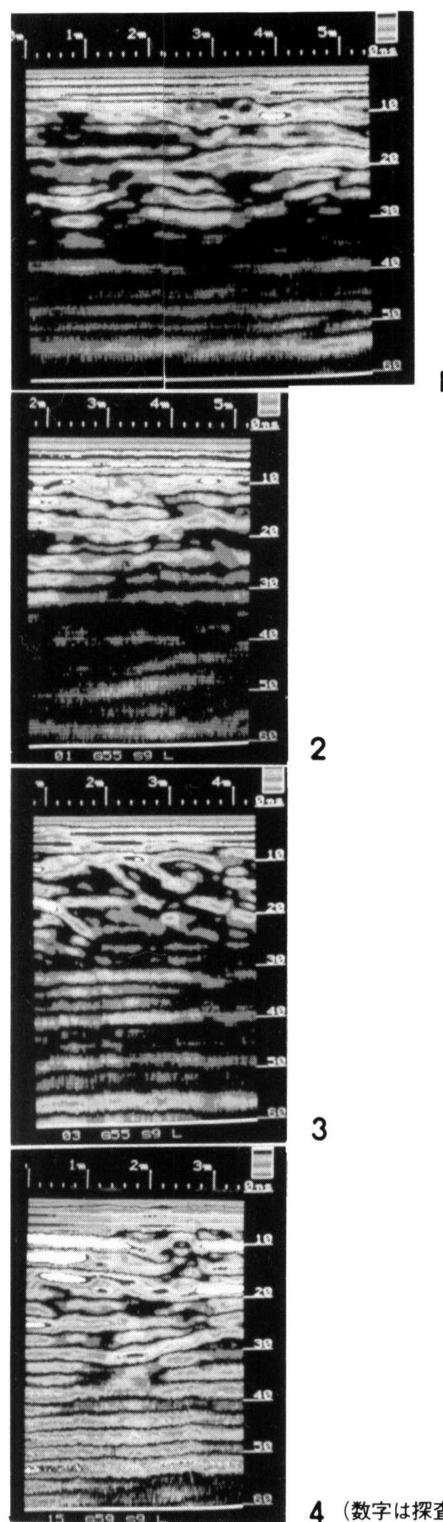


2. 金子6号墳

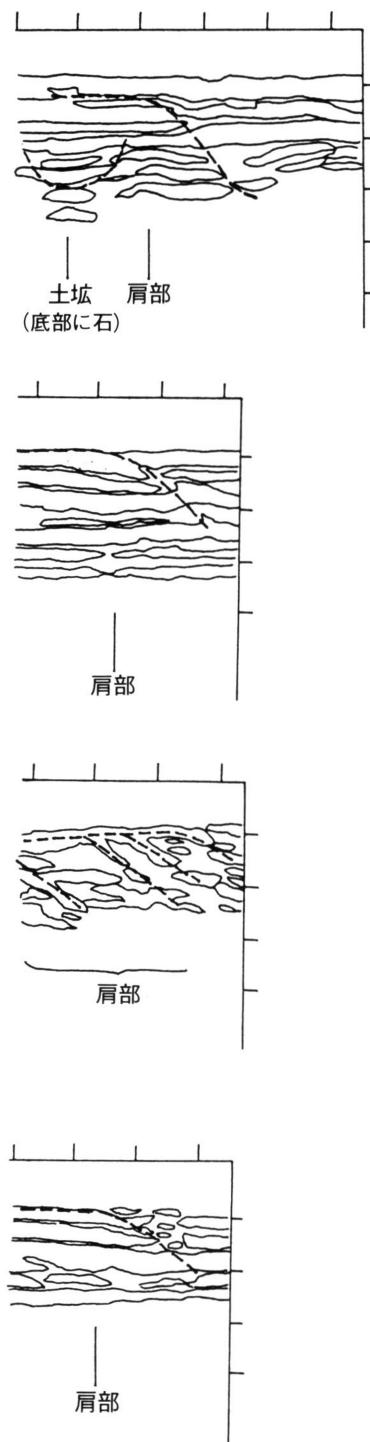


金子7号墳出土遺物

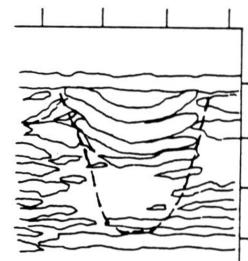
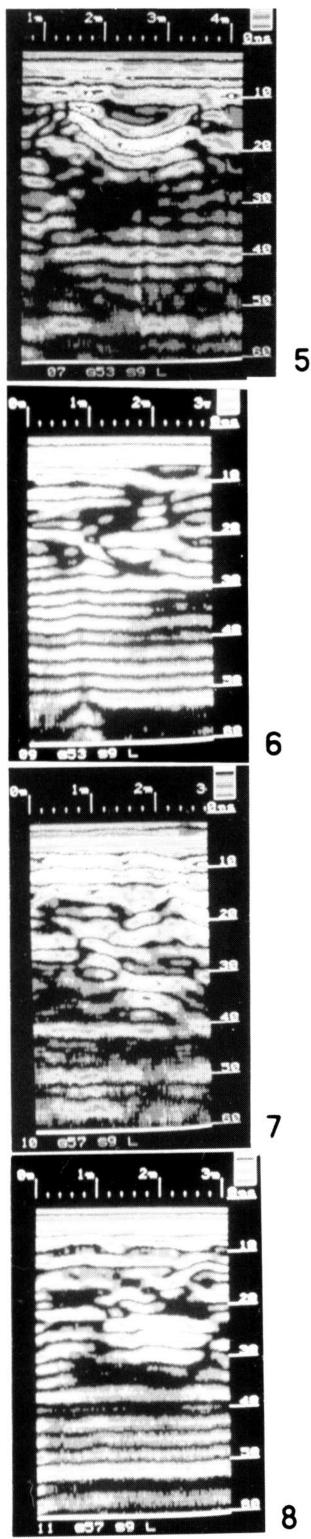
図版14



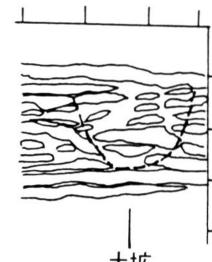
4 (数字は探査位置を示す)



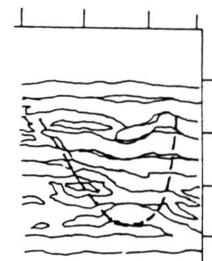
図版15



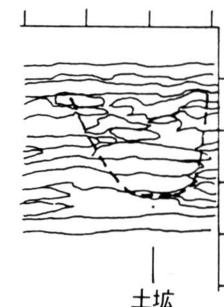
大形の土塙



土塙
(底部に石)

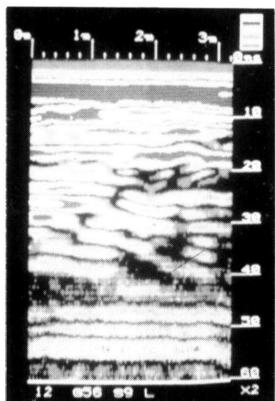


土塙
(底部に石)

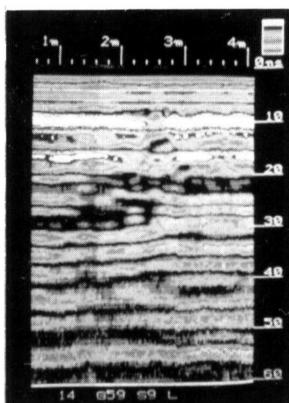
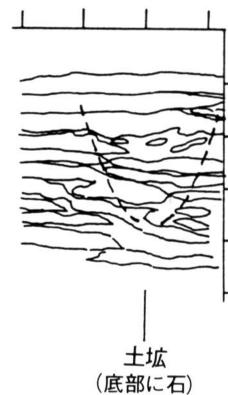


土塙
(底部に石)

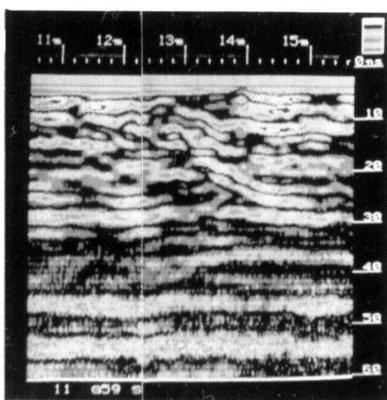
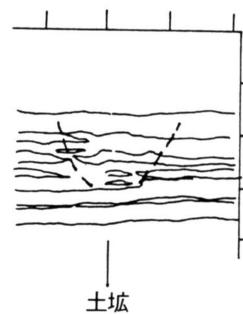
図版16



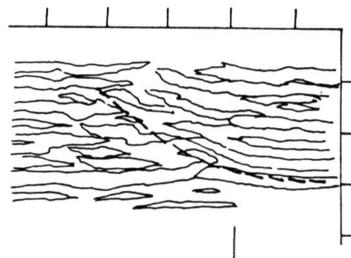
9



10



11



総社市埋蔵文化財発掘調査報告 6

**長砂谷 1 号 墳
長砂谷製鉄関連遺跡**

1988 年 12 月 印刷

1988 年 12 月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央1丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社1丁目10番24号

